

【後日談】お嫁さまは〇〇くんさんっ？

(副題：宮司さんは耳年増っ？)

---

窓から差し込む午後の陽射し。繁る常緑樹の葉陰によって程よく遮られた光は、この座敷の中央を心地よく照らし、ささやかな茶会を麗らかに彩ってくれる。

——ちりん、とひとつ涼やかな音をたて、窓辺に吊られた風鈴が風に揺れた。

このところは残暑も随分と和らぎ、古き良き日本建築の造りを取り入れたこの座敷においては、風の通りが良い日であれば空調などといった文明の利器に頼らずとも、こうして快適な空間として我々をもてなしてくれる。

快適な空間。そう、快適な空間のはずなのだ。麗らかな午後の陽射し。夏の終わりを感じさせる爽やかな風。揺れる風鈴の音。遠く近く重なる、ツクツクボウシの声。座卓に置かれた、熱い日本茶と菓子。完璧なまでに『快適な茶会』として詠えられた空間である。

そして目の前におわすは、その茶会の主賓である美貌の我が主。

——否。『元』美貌の、と言うのが正しいか。現在はあまりにあどけない姿となり果て、近所の子ど

もたちと泥まみれで戯れていても、なんら違和感のない姿になられた『お子さま』主。……そんなことを口にすれば、容赦なく髪をひっぱられる（最悪むしられる）ことは想像に難くないので、間違っても口にも顔にも出してはいけませんが。

そう、色々思うところはあるものの、この快適な空間の中、麗し（？）の主の花のかんばせが向かいにあり。その唇からは時に楽し気に、時に憂いを帯びて、「ここ最近の『生活』のことを語って聞かせて下さるのだ。そんな午後の茶会が、心地良く感じられるのは当然。……当然、のはずである。

ああ、されど。

何故に私はこうして益体もない思考にぐるぐると囚われているというのか。

朗々と降り注ぐ天啓のごとく、主の声に耳を傾けていたのは最初だけ。今はぶつちやけ、『さつさと終わってくれんかなー』とか考えてたり、明日の行事の進行を脳内試行などして、現実逃避しかかっているのは私だけの秘密である。……バレたらしばかれるぞ、私。

現実逃避。さもありなん。話の内容が、頭に入っていない。……いや。むしろ入れてはいけない。そうなれば相手の思っつぽ。深く考えてはいけない。いけないのだ。いけないったら、いけない。いけません。

見てくれだけは完全に『あどけない少女』と言える目の前のお方と、その『かわええ嫁さん』（もち

ろん女性である）との新婚生活。いや、もうこの際はつきりと（胸の内で）言わせて頂こう。お二方の『破廉恥極まりない夜の生活』……性生活の赤裸々な裏話などっ!!

女性二人（片方は半分詐欺だと思っ）がしどけなく絡み合う、妖艶な絵面が脳内にちらつくが、想像してはけない。……いけませんったら!!

これは一体何の修行……いや、何の罰なのか。ああ……茶の誘いなど恭しく固辞し、掃除が終わった時点でさっさと退散すべきだった。そうすれば、一生知らずに済んだであろう『新しい世界の扉』を、この歳になってわざわざ開きかけることもなかっただろうに。……まさに後悔先に立たず。半刻ほど前の己の選択に齒噛みするばかりである。

そして。いくら私が現実逃避をしようと、口からエクトプラズムを吐き出そうと、主の口上は止まらない。止まってくれない。

私にできることと言えばただひとつ。心を無にして、あるいは現実逃避して、ひたすらに聞き流すこと。終わりを待つこと。これに尽きるのだった。

（以下、宮司の脳内検閲により、一部伏字でお届けいたします）

今日もウチの嫁さんが最高に可愛い。たまらん。

ちよつとべろちゅーしただけでへろへろになるととか、ちよーつと乳揉んだだけでフニヤフニヤになるととか、ちよーつと色々べろべろしただけでトロットロになるととか、ちよーつと×××でかき回しただけでグチヨグチヨになるととか。

はー、ホンマ感じやすうて、やらしい身体に育ったもんやて、天に感謝してもたわ……。ウチ神さんやのにな。あはは！

ああ、思い出すだけでにやけてまう。あの可愛さ、やらしさは反則やわ。そら朝からでも盛つてまうんは当然やろ？

寝起きの嫁さんな？甘えるみたいにぎゅーって、ウチに縋りついてくるんよ。あれ、ホンマかわゆうてたまらんのよねー。むにやむにや言いながらそんなんされたら、そらウチかて元気になるん、決まっとるやろ？

そもそも朝やしなあ。×××が臨戦態勢になつとるとに、ふにやふにやのあつたかい嫁さんがす

り寄ってくるんやで？そんなん、据え膳以外の何物でもないわ。

ああ、もちろん今朝も美味しく頂いてきたでえ！はー、今日もめっちゃ可愛かったわあ……ウチの嫁さん。前にちよーっとやらかしてしてもて、朝から『せつ×す』はアカン、言われてしもたから、触りっこしたり舐めっこしたりするだけやけどな。

今朝もあんまり気持ち良すぎて、ついついまぐわってまいそうになったけど、そこは鋼の意志で何とか乗り切ったで。よう耐えたもんやわ、ウチ。偉いやろ？

まあ、なんで朝はアカン……いうことになったか、言うたら。こないだ、嫁さんのオネダリが聞きたい一心でな？ちよーっと意地悪してしもた、言うか。

それまでも朝は『激しいの』はアカン、とは言われてたんやけど。まあ、アレや。嫌よ嫌よも好きのうち……言う感じ？で。夫婦の間の駆け引き、言うか。そこを如何にでろでろに崩して、求めてもらうかが一つの楽しみ、言うか。その日もそういうノリで……ついつい、な？やりすぎた……っちゅーか。

寝起きの嫁さん、いつもどおりたっぷり可愛がった後にな？トロットロになった嫁さんの下の口に、ちよーっとだけ、先っぽだけ、にゆるんってひっかけて、入口のとこだけずーっとクチュクチュクチュクチュ、しつこくこねくり回して。『これは激しないし、入れてへんからせえふやろ？』言うてイジメて

たら、嫁さん……我慢できんで泣き出してしもてなあ。

あらたまらんかったわ……！『中に入れて、もつと奥突いて』言つて、腰揺らして泣きながらねだつてくる嫁さん。とんでもない破壊力やったでえ……！

嫁さんのオネダリがあんまりやらしすぎたもんやから、ウチも完全に頭飛んでしもてなあ。最終的に何回戦？んー、5回戦？くらいしてしもたんよねえ。うん、朝だけで。内3回は、抜かずの3発や！

まあ、その日と次の日が連休やったらしくて、嫁さんの仕事が休みやったから良かったんやけど。結局一日中布団から出られへんことになった嫁さんから、『今後、朝からせ×くすは禁止』で、ほつぺつねられてしもたんよ。……せやけど、あれは嫁さんが誘ったんやもん……。嫁さんがやらしすぎたせいやもん……。

ああ、もちろんその後も美味しく頂いたで？どうせ布団から出られへんのやし。翌日も休みなら一日中愛し合うのもええやろ、て。この機会に、あのすけな身体にウチの愛情をすっかりわからせたらなアカンなーって！それこそ昼も夜も、ずーっ……とじっくり、ねっちり、日がな一日まぐわつて。

そろもう、色々シたでえ？『えろ本』で仕入れた現代の性知識。あの時は大いに活躍してもらたわ！

嫁さん、もうトット口になってしもてなあ。最後の方なんか、もうウチが何言うても『うん、うん、好き、好き』しか言えんようになってしもて！フニヤフニヤになってウチに縋りついてきて。最っ高にえろ可愛かったわあ……。あー、思い出しただけで勃ってまいそう……。

……けど。その時に、な？ちよつと出来心で試した『ふれい』があるんやけど。あれがなー。ウチ、どうもひっかかっとるんよ……。

今のウチの身体……わかつてはおるけど『ちんちくりん』もええとこやし。嫁さんはホンマに満足してくれとるんやろか。て。主に伽の面でな。

そらまあ、あの素直な子おの正直な身体が、嘘なんか吐かれへんのは重々承知しとるで？『身体は正直』ゆうやつ？これ、えろ本読んで、めっちゃええ台詞や思たわ！現代日本人、うまいこと言うな……て、思わず膝叩いてしもたで！

……ああ、ちやうちやう。えろ本ネタは色々やりたいこと一杯あるんやけど、今はそこやのうて。ウチの身体の問題な。この『ちんちくりんぼでい』に、嫁さんは不満とか感じてたりせえんやろか……と。

嫁さんと初めて出会った時みたいに、成体の身体やったら、『ばいーん』で『ばいーん』な乳で嫁さんの顔、やさしく包んだげたり、自慢の『びっぐまぐなむ』で、奥の奥までじっくりねっちよりこね回

したり。そろもう、ヒイヒイ言わしたげられるんやけどなあ……。

優しい子おやから『不満なんかない』言ってくれるんやけど、やっぱり成体の時の身体とは全然ちゃうんは、自分が一番ようわかっとなるからなあ……。なまじ嫁さんにも昔の姿を知られとるいうんも、なんちゆうか……気がかり、言うか。

『むしろ、もうちよつと控えても……』て、恥ずかしそうにゴニョゴニョ言うんも、ウチの事気遣ってくれとるんやろなあ……！こんな『ちんちくりん』やと体力ないんちゃうか、とか。は……、よう出来た嫁さんやで、ホンマ……！こら余計な心配させんために、ウチももつともつと頑張つて励まんと！かわええ嫁さんに『さあびす』せなアカンなあ！

……ああ、アカンアカン。ついつい話、脱線させてまうわ。嫁さんの可愛さ、恐るべし……やな！

ほんでな、その『朝から晩までせつ×す』した時に、な？ちよつと出来心……言うか。夫としての甲斐性見せたいっちゅー、見得……言うか、男心……言うか。せつかく嫁さんから毎日、力分けてもらつとるわけやし、な？

ちよーつと。最中に、あっちの姿になってみたんよ。成体のほう。うん、真つ最中。×××入れてる時。奥までぐちより入ってる、まんま真つ最中や。

嫁さん、めっちゃくちやビックリしてしもてな？ウチの×××、きゅーーって！締め付けたまんま、連続でイッてしもて。アレ絶対、中の褌が痙攣しとったなあ……。

すごかったでえ？普段の倍ぐらいの大きさになったウチの×××に、トロトロひくひくの嫁さんの褌が、ぐっちより絡みついてなあ。そっからはもう、嫁さんいきっぱなし。ウチのぼいんな乳にも、上の口で甘えて吸い付いて。×××には下の口でちゅうちゅう吸い付いて。上も下も、もうどろっどろ。

……で、結局最後はウチが何言うても何しても、とろんとろんの、ふにゃんふにゃんやし。そろもう、一晚中めっちゃくちや濃厚なまぐわいを楽しんだわけや。

そんでウチも確信したんよ！ああ、やっぱり嫁さんも成体のウチとの『せ×くす』がしたかったんや……って！ずっと物足りんのを我慢させてたんや……って、反省して。これからは夫の面目にかけても愛し尽くしたらなアカンて、心意気も新たに、気絶した嫁さん抱えて朝日に誓ったわけや！

……せやのに、な？翌朝、その日もまだ休みやったし、目え覚めた嫁さんとそのまま一戦交えよ……。思て、成体の姿のまんま目覚めのちゅーかましたら。ちゅーの後に、ハッキリ言われてん。『大人は禁止、ちんちくりんでいい、ちんちくりんがいい』て！

あんだけ……、あんだけ気持ち良お啼いてくれたのに、やで！何回イったかわからんくらい、どろっどろに蕩けてたのに、やでえ！ハッキリ言われてしもたんよ……。『大人はアカン、ちんちくりんがえ

え』て。

何でや!?何がアカンかったんや!?ウチ、なんか嫁さん怒らせるようなことしてしもたんかいな!?

……必死に聞いてみたんやけど、嫁さん怒ってる感じやなかったし、むしろ恥ずかしがತ್ತる言うか、困ってる……?言う感じで。結局答えてくれへんかったんよ……。

何や……、何がアカンかったんやろ?ウチ、未だにわからんで、どうもひっかかっとるんよねえ……。

「……てことがあったんやけど。どう思う、坊(ぼん)?」

「……まで一言もこちらが口を挟む隙すら与えてもらえず。相手の口上はまさに立て板に水。破竹の勢い。光陰矢の如し。……いや3つ目、これは誤用だ。半分白目をむいて過した時間の貴重さを思えば、ある意味正しいかもしれないが。……ああ、そうだ。久しぶりに会った親戚のおばさんの弾丸トーク。うむ、これが的確な表現だろう。」

「……あの、琥珀さま?その……」

内容はさておき意見を求められたわけなので、ようやく一段落したのかのんびり茶をすすり始めた目の前の少女——の姿をした存在に、たじろぎながら声をかければ。こちらが二の句をつぐ前に、相手はくわっと目を見開くとわなわなと震え始め。

——いかん、何か失言があつただろうか。すわ『髪をむしられる!?』と恐れおののくも、そもそもまともな発言などできていないことを思い出して首をひねり、告げられる次の言葉をおとなしく待つしかできず。……この数十年ですっかり染みついた忠犬根性が、正直情けないやら恥ずかしいやら、である。

「——はっ!?もしかしたら……!嫁さん、実はウチの『ちんちくりんぼでい』が好きな、ろりこん?しよたこん?言うやつやったりするんかいな……?」

仮にも【神】の口から出た俗世の煩惱に染まり切った台詞に、もはやアルカイックスマイルもかくやと言わんばかりの笑みを浮かべる以外、私に逃避の術はなかった。——ここは寺ではなく、神社だというのに。

そう、目の前におわす『ちんちくりん』……もとい、少女のような姿をした存在こそ、まごうことなき【神】の一柱。この稲荷神社が祀る【神】——琥珀さまとおっしゃる、自由気ままに長きを生きる【稲荷神】、そのお方なのである。

ただし、今現在この神社におわすのは、術で分かれた琥珀さまの『影』。つまり分身であり、ご本体は『愛しの嫁さん』のところへ居候中という、何ともまあ……無茶苦茶な離れ業をやらかすこのお方に、もはや只人である自分などが何を言っても無駄なことは、子どもの頃からの経験上重々……それはもう重々承知しているのだが。

だが、それでも言いたい。せめて心の中でだけでも、言わせて頂きたい……！

わざわざ分身と意識共有してまで、私に新婚生活（というか、新婚夫婦の性生活）の惚気話を聞かせる必要があるのですか!? それもこんな赤裸々に……赤裸々につ……！

今度あなた様の『かわええ嫁さん』にお会いした際、私は一体どのような顔をすれば良いと言うのですか!?（主に性生活の）お話はかねがね伺っております。いつもうちの主がセクハラ三昧で、大変なご迷惑をおかけしておりまして申し訳ございません』とでも謝れば良いのですか……!?

——ああ、泣きたい。泣いてしまいたい。

人の心、神知らず……とでも言おうか、私の心の内など知ったこっちゃないと言わんばかりに、琥珀さまの惚気話（の体を装う猥談）は続く。『それって放送禁止用語では……?』というような、際どい単語を時に交えながら。

ああ……、もしこんな状況を他人に見られたら。こんな会話（琥珀さまの独演会だが）を誰かに聞かれたら。

『あろうことか神職である宮司が、お稚児さんに妙な性知識を植え付けてる!?』とか、『宮司のせいで琥珀ちゃんが耳年増に!?』とか。そんな恐ろしい噂が立ちでもしたら……。

『いえ、それはむしろ逆で！私の方が耳年増にされているのです！逆セクハラなんです！』と主張したところで、まず誰も信じてくれはしないだろう。

耳年増。そも私は妻子ある男であり、この歳なので、私にこの言葉を当てはめるのはおかしいのだが。この言葉ほどしっくりくるものが他にないのだから仕方ない。知らんでよかったマニアックな性知識を、この歳の男が植え付けられようなどと誰が思う。

ああ。それにしても先ほどのような噂が実際に流れでもしたら。きっと私はこの町にいらなくなる。『性犯罪者予備軍』のレッテルを貼られて、後ろ指さされながらこの町を後にしなければならなくなるのだ。残された家族には迷惑をかけてしまうことになるな……。すまん……。許してくれ、最愛の妻よ、息子たちよ。そして、父さん母さん……。不甲斐ない息子をお許しください。

「……なあ、なあって。ウチの話、ちゃんと聞いとる？坊？」

現実逃避どころかうつつすら遠のき始めた意識が、走馬灯のように家族の姿をちらつかせ始めた頃。突如にゆつと目の前に現れた饅頭の包みと、かけられた声にはつと我に返れば、正面にはぶくりと頬を膨らませながら片手で頬杖をつき、もう片方の手で饅頭を突き出す琥珀さま（の分身）が。

差し出された饅頭の包みを思わず受け取れば、膨れた頬がにんまりと笑みの形に崩れる。

「はは、相変わらずの朴念仁やなあ、坊は」

『まあた変顔になつとったで？』そう言うてからりと笑う、その表情。子どもの姿でありながら、子どもには到底作れない、底の知れぬ表情。ああ、やはりこの方は【神】なのだと思い知る。

饅頭の包み紙をはがして半分ほどかぶりつけば、ほくりとした大ぶりの栗がまろび出てくるのに自然と口元が緩む。二この和菓子屋は相変わらず良い仕事をしているなど、その味わいに満足しつつ、冷えつつある茶で喉を潤した。

琥珀さまも二この饅頭はお気に入りらしく、包み紙がどんどん積み重なっていく。無心でもぐもぐやっている姿は非常に愛らしく、ようやく訪れた『真に平和な』午後の茶会に、こちらの頬もほころぶばかり。

……孫ができたなら、こんな感じだろうか？まだ見ぬ未来の我が孫へと思いを馳せながら、残り半分の饅頭を咀嚼し、温くなった茶をすすする。ああ、なんと平和なことか。

だがまあしかし。しがない中年男の平和なお茶タイムなどが長く続いてくれるはずもなく。

「――で。坊はどない思う？嫁さんは『ろりこん』とか『しよたこん』とか言うやつなんかいな？大人の×××やと満足できひん、ちよつと特殊な性癖やつたりするんやろか？まあ、ウチは嫁さんが悦んでくれるんやったら、何でもかまへんのやけど……」

いそいそと身を乗り出して尋ねてくる【神】に、結局話題はそれなのかと漢泣きする他なかった。

ちやぶ台に突つ伏す直前、視界に入ったのは新たな饅頭を摘まみ上げた【神】の左手。その白魚のような薬指を彩る金色の円環が、きらりと光り。暗闇で獲物を狙う狐の目のような、不憫なおっさんの姿を見て無邪気に笑う、穢れなき少女の瞳のようなそれが、また何とも眩しかったのである。

（ロリコンとかショタコンとかの問題ではなく、奥方は単純に、成体の貴方の絶倫ぶりに慄かれただけなのでは……。そして、それだけセクハラ三昧されても怒らない奥方よ、心が広すぎますぞ……）

【後日談】お嫁さまは○○○さんさんっ？…完